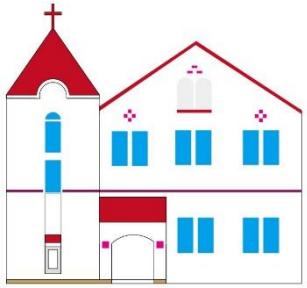
祈ります。
愛する天のお父様。
私達をどうぞいつも御前にへりくだる者としてください。
そして、いつもイエスさまに聴いて、
言葉を発し、行動を起こすことが出来る者に変えてください。
御心を知り、みこころを行う者としてください。
御名があがめられますように！
主の御名に、
感謝と賛美を捧げます。
アーメン。



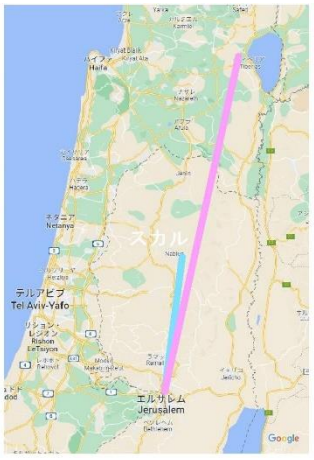
http://jesus.holy.jp

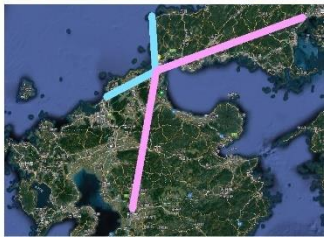
「お飲み物、お食事は何になさいますか？」

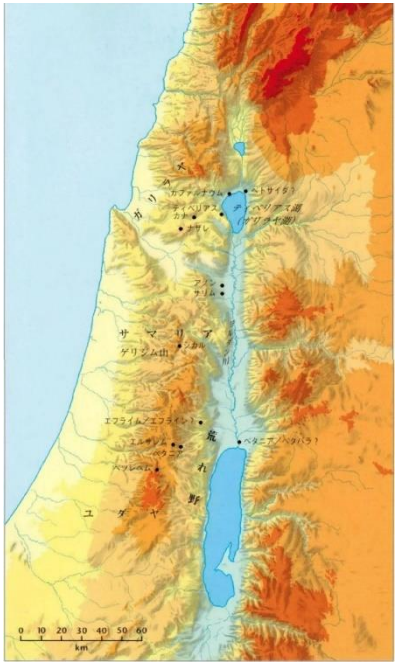
2023年6月18日（日）

北九州シオン教会

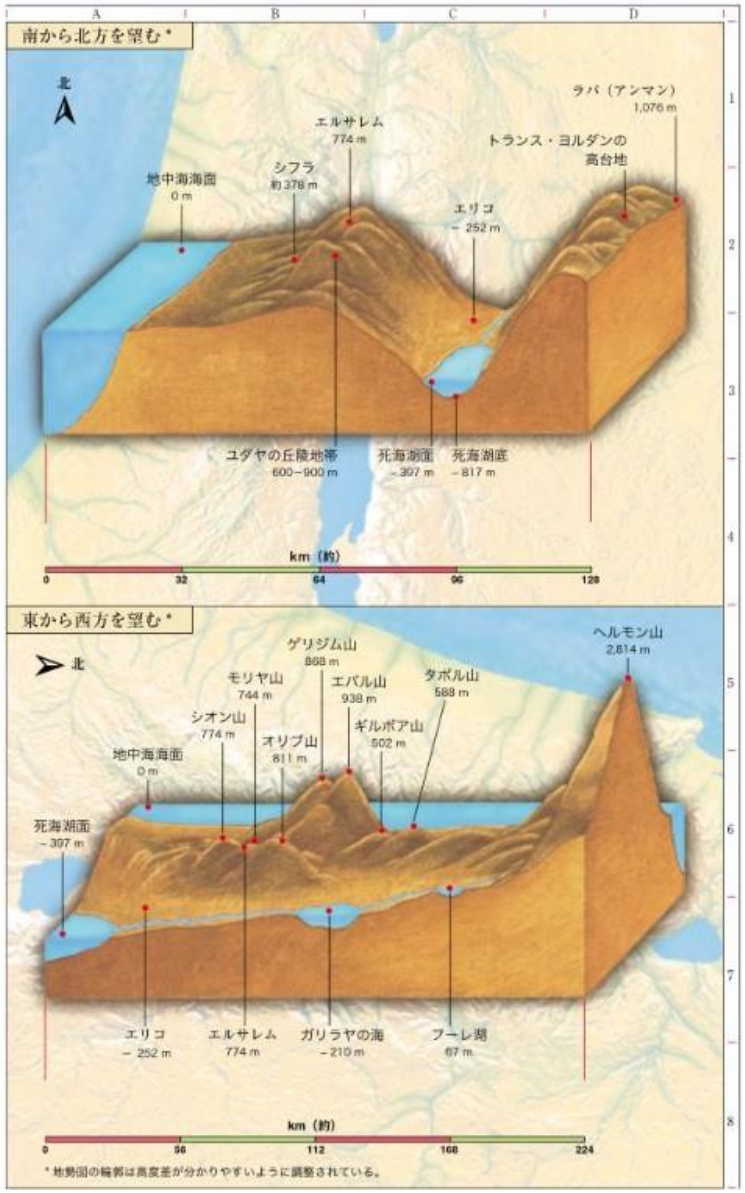
【神芝居】　拍子木の音♪カン　カン　カ　カ　カ　カカン!!
イエスさまはユダヤからガリラヤへ行かれましたが、この距離はおよそ
この教会から熊本市までの距離です。
またサマリアまでの距離は
教会から古賀市まで、または山陰の角島大橋のたもとまでの距離です。



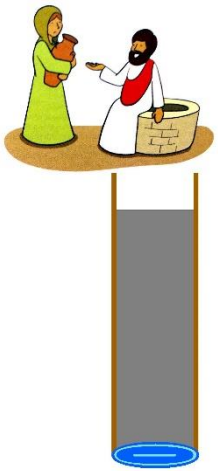




サマリアの町スカルはゲリジム山の北東に位置しています。
イスラエルを「南から北方を望む立体図」と「東から西方を望む立体図」
ゲリジム山は　標高 881m　皿倉山 622m　比叡山 848m
谷から 381m　風師山 362m　です。



イエスはサマリアの女に
「わたしに水を飲ませてください」と言われた。
「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の
私に、飲み水をお求めになるのですか。」
イエスは答えられた。「もしあなたが神の賜物を知り、
また、水を飲ませてくださいとあなたに言っているの
がだれなのかを知っていたら、あなたのほうからその
人に求めていたでしょう。そして、その人はあなたに
生ける水を与えたことでしょう。」



その女は言った。「主よ。あなたは汲む物を持ってお
られませんし、この井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に
入れられるのでしょうか。　　スカルの井戸は深いのです。
イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渇きます。
しかし、わたしが与える水を飲む人は、
いつまでも決して渇くことがありません。
わたしが与える水は、その人の内で泉となり、
永遠のいのちへの水が湧き出ます。」
彼女はイエスに言った。
「主よ。私が渇くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、
その水を私に下さい。」
イエスは彼女に言われた。
「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」
彼女は答えた。「私には夫がいません。」
イエスは言われた。
「自分には夫がいない、と言ったのは、そのとおりです。
あなたには夫が五人いましたが、
今一緒にいるのは夫ではないのですから。
あなたは本当のことを言いました。」
彼女は言った。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。
私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、　　（↓ゲリジム山）

あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」
イエスは彼女に言われた。
「女の人よ、わたしを信じなさい。
この山でもなく、エルサレムでもないところで、
あなたがたが父を礼拝する時が来ます。
救いはユダヤ人から出るのですから、
わたしたちは知って礼拝していますが、
あなたがたは知らないで礼拝しています。
しかし、まことの礼拝者たちが、
御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。
父はそのような人たちを、
ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。
神は霊ですから、
神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」
女はイエスに言った。
「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。
その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」
イエスは言われた。
「あなたと話しているこのわたしがそれです。」　　主の私達への愛！
「〇〇さん、大好きだよ！
私はあなたを愛しているよ！」
ここでお近くの方とグループを作ります。
→分かち合い→祈り合い→奨励へと続く。

2023 年 6 月 18 日（日）
柴田常雄 兄　奨励　ヨハネの福音書 4 章 1～42 節
「お飲み物、お食事は何になさいますか？」

主の聖い御名を褒め称えます。
皆様も、何度かこの聖書の箇所を読まれ、黙想されたことと思います。
黙想の度に、違う気づきと感動を、受けられたのではないでしょうか。

私が黙想の中で示された、いくつかのことをお話ししたいと思います。

このサマリアの女は、魂に飢え乾きを持った人だったのではないでしょうか。二人の会話は、最初、食い違いばかりのようでした。
彼女は人間的な思い、イエスさまは神の奥義を語られました。
でも話は次々展開し、
彼女が「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。
その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」
と言うと、イエスさまは「あなたと話しているこのわたしがそれです。」 と
答えられます。
その答えを聞いて彼女はイエスさまをキリストと信じました。
町の人と距離を置いていた彼女が、自分の水がめを置いたまま、
町の人々に「来て、見てください。
私がしたことを、すべて私に話した人がいます。
もしかすると、この方がキリストなのでしょうか。」
と伝えに行くのです。彼女は変えられました。
　イエスさまは、サマリアの女がヤコブの井戸にやって来る前から、彼女のすべてをご存知でした。彼女の波瀾万丈の人生も、キリストの救いを渇望する彼女の飢え乾いた魂も、イエスさまは全てご存知でした。
彼女は後半の 36 節に出てくる「永遠のいのちに至る実」でした。イエスさまは愛をもって彼女に向き合ってくださいました。

　現代の私たちにも同じように、イエスさまは、愛をもって向き合ってくださり、私達を救ってくださるのです。
　町の人たちもイエスさまを引き留めて、私たちの町に滞在して欲しいと願いました。人々はイエスさまの言葉を直に聞いてこの方が本当に世の救い主・キリスト　だと信じたのです。

　私はこの聖書の箇所を何度も読んだのですが、
イエスさまは一滴の水も、一切れの食物も口にしておられないようです。
その代わりにイエスさまは、
その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出る、生ける水と
父のみこころを行いそのわざを成し遂げる　という食べ物　を教えます。

また 23・24 節で、イエスさまは、まことの礼拝について、
私たちに教えておられます。
「まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。
今がその時です。父はそのような人たちを、
ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。
神は霊ですから、神を礼拝する人は、
御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」

　生ける水、御霊と真理による礼拝、父のみこころを行い
みわざを成し遂げる。
　これらのことは、どうしたら私たちのものとなるのでしょう。
実は、私たちには何も出来ないのですが、
父なる神様のほうから、私たちに働きかけて来られたのです。
聖書の創世記１章１節からヨハネの黙示録の最後まで、ずっと一貫して、
神様は愛をもって私たちに語りかけておられます。
罪深い私たちのため、御子イエスをこの地上にお遣わしになり、
罪なきイエスさまを十字架につけることによって、

私たちの代わりに罪を購われました。
イエスさまは十字架の死を味わわれましたが死から甦り復活されました。
弟子達と 40 日の間、共に過ごされ、
ご自分が生きていることを示されました。
イエスさまは弟子たちに、父が約束された聖霊を、
都に留まって待つように言われ、
彼らの目の前で天に引き上げられました。
その 10 日後、イエスさまの復活から 50 日目、ペンテコステの日に、
父は約束の聖霊を、祈り待ち望んでいる弟子たちに送られたのです。

この聖霊は現代に生きている私たちにも与えられています。
生ける水、御霊と真理による礼拝、父のみこころを行い
みわざを成し遂げる。これらのことは私たちに委ねられているのです。

「お飲み物、お食事は何になさいますか？」
さあ、イエスさまが与えてくださる、
生ける水と、
父のみこころを行い、みわざを成し遂げる食事を
ご一緒に召し上がりませんか。

ここで、イエスさまの御言葉を少し読みましょう。
マタイの福音書 11:28～30 【新改訳 2017】
すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。
わたしがあなたがたを休ませてあげます。
わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしの
くびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、
たましいに安らぎを得ます。
わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

サマリアの女がイエスさまに出会い、心に触れられた時、彼女の心の
重荷が下ろされ、イエスさまからの平安と喜びを心に受けたように、
私たちが背負っている色々な重荷を、
イエスさまの足もとに下ろしてみませんか。
イエスさまが私たちの所に来てくださり、
安らぎをと将来への希望を与えると約束してくださっています。

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」
イエスさまが一緒に担ってくださるのです。

また、ヨハネの福音書　5:19・20 【新改訳 2017】
イエスは彼らに答えて言われた。
「まことに、まことに、あなたがたに言います。
子は、父がしておられることを見て行う以外には、
自分から何も行うことはできません。
すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。
それは、父が子を愛し、
ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。」

イエスさまは、父なる神さまから聴くこと以外は、
何もなさいませんでした。
イエスさまに全てを委ね、御心を聴いて、それを行うことは、
父なる神さまに必ず、喜んでいただけることです。

私はこの聖書の箇所を読んでいて、
私が大切にしている、一つのことを思い出しました。
大学の 4 年間、
下関ルーテル教会の読書会に一対一で出席していた私は、
社会人一年目の 11 月に、俵　貢牧師から「受洗しませんか？」

と電話をいただきました。
ちょうど家にあった中央公論社の「世界の名著」シリーズの
「ルター」の一冊を手に取り、
マルチン・ルターの「キリスト者の自由」を読んだのでした。
その時、次の一節に目が留まりました。
それは貧しく汚れた娼婦の少女に対して
イエス・キリストが結婚を申し込むという場面です。
　少女が「どうして私のように穢れて、貧しく、薄汚い衣を着た者が
あなたのように聖いお方と結婚できるでしょう？」と問うと、
　イエスさまが「何も心配しなくて良いよ。
あなたの穢れ・貧しさ・汚れた衣は私が全部受け取ろう。
代わりに私の聖さ・豊かさ・清い白い衣をあなたに着せてあげよう。
そうして、私と結婚しよう！」
　この文章を読んで、当時、自分自身に失望し、希望を無くしていた私
は、あたかも私自身がこの少女のように感じ、
彼女に対してイエスさまがしてくださったように、自分の汚れたものの代
わりに、イエスさまの素晴らしいものをすべて与えてくださるのなら、
「あなたの結婚のお申し出、喜んでお受けします。」と答えたのでした。
受洗の時、
目の前・将来が真っ暗だった私ですが、
その真っ暗なところに、一本す一っと白い道が開けるのを感じました。
また、私の身体の真ん中に、一本の蝋燭の火が灯ったのを感じました。
　この時から、私の人生は変わったのでした。

　礼拝に集う私達の内側に、今、生ける泉が湧いているでしょうか。
私たちは一週間に一度、この礼拝堂に水を汲みに来て、
でも、また、いつのまにか渇いてしまうのでしょうか。
　私自身がそうした歩みをしていたことを
皆さんの前に正直に告白いたします。

月曜日から土曜日までは神様の前に出ることもなく、いえ、日曜日も
そうでした。　自分からは聖書も読まず、祈りもしない者でした。
　ですから心の中は乾ききっていたのに、それでも平気な私でした。
奉仕はそんな私でも喜んで、できるんですね。
でも神様が喜ばれるのは、教会への奉仕でも犠牲でもないのです。
マルタとマリアのマリアが、（ルカの福音書 10:38～42）
イエスさまの足もとに座り込んだように。
御言葉をへりくだって聴き、従う者を、神さまは喜ばれます。
毎朝、神さまの御前にひざまずき、聖書を開き、御言葉に聴き、黙想し、
語り掛けられたことを、自分に与えられた一日の中で実行していくこと。
これが必要不可欠なことを、今、私は実感しています。

少しの時間、ご一緒にお祈りましょう。

渡辺禎雄　型染版画

レンブラント ： エマオのキリスト（一部）（ ルカの福音書 24:30･31 ）